



狂犬病ワクチン接種のご案内

ワクチン接種前に必ずお読みください



ワクチン接種までの手順

1. 問診（体調や病歴の確認）

副反応の病歴がある患者さんは、事前にお申し出ください。

副反応の例

注射部位の腫脹や疼痛、顔面腫脹（ムーンフェイス）、発熱、掻痒（かゆみ）、下痢、嘔吐、食欲減退、アナフィラキシーショック、後駆麻痺、死亡例も報告されています。

2. ワクチン接種前の身体検査

3. ワクチン接種

4. ワクチン接種後に、待合室やお車などの安静にできる場所で**20分以上体調を観察**してから帰宅していただきます。（病院から出るときはスタッフまでお声かけ下さい）

5. ご帰宅後は、下記の注意点を厳守してください。

- ・ 2-3日は安静に務め、シャンプーや激しい運動は避けてください。
- ・ フロントラインやフィラリア予防薬等の投薬は、2-3日してから行ってください。

過去に副反応を経験した場合

1. ワクチンの種類を見直し、適切なワクチンを接種します。

2. 副反応を起りにくくするお薬を、事前または同時に投与してワクチン接種を行うことがあります。

3. 事前に代表的な感染症のワクチン抗体を測定し、感染症発症防御能を判定することがあります。

4. ワクチン接種を避けます。

下記の患者様は予防接種を避けます

1. 身体検査で、健康状態に問題があったり、高齢でワクチン接種が困難とみなされた場合。

2. 免疫抑制剤などワクチンに影響する治療を受けている。

3. てんかん発作の既往歴がありコントロールできていない場合。

4. 過去に重度の副反応が認められた場合。

5. 狂犬病ワクチンなど不活化ワクチンを接種して1週間に満たない。

6. 混合ワクチンなど生ワクチンを接種して1ヶ月に満たない。

7. 過剰に興奮し抑止が出来ない。

8. ワクチン接種後に動物の様子を観察できない。

9. 妊娠中、発情中、授乳中、アレルギー体質。

10. 病院の受付時間が残り30分に満たない時間帯の接種はお勧めし兼ねます。

11. 現在、咬傷事故後の鑑定期間中である場合。



参考資料

狂犬病ワクチンの使用説明（ワクチン使用説明書から一部抜粋）

【用法及び用量】

犬及び猫の皮下又は筋肉内に1mlを注射する。

【犬又は猫に対する注意】

1.制限事項

(1)本剤の注射前には健康状態について検査し、重大な異常(重篤な疾病)を認めた場合は注射しないこと。また、以前に本剤又は他のワクチン投与により、アナフィラキシー等の副反応を呈したことが明らかなものには注射しないこと。ただし、対象犬又は猫が狂犬病ウイルスに感染するおそれがあり、かつ、本剤の注射により著しい障害をきたすおそれがないと認められる場合には、注射の適否の判断を慎重に行い、対応すること。

- ・ 重篤な疾病にかかっていることが明らかなもの。
- ・ 以前に本剤又は他のワクチン投与により、アナフィラキシー等の副反応を呈したことが明らかなもの。

(2)対象犬又は猫が、次のいずれかに該当すると認められる場合は、健康状態及び体質等を考慮し、注射の適否の判断を慎重に行うこと。

- ・ 発熱・咳、下痢、重度の皮膚疾患など臨床異常が認められるもの。
- ・ 疾病の治療を継続中のもの又は治療後間がないもの。
- ・ 交配後間がないもの、分娩間際のもの又は分娩後のもの。
- ・ 高齢のもの。
- ・ 明らかな栄養障害があるもの
- ・ 他の薬剤投与、導入又は移動後間がないもの。
- ・ 飼い主の制止によっても沈静化が認められず、強度の興奮状態にあるもの。
- ・ 1年以内にてんかん様発作を呈したことが明らかなもの。

(3)投与後の制限事項

- ・ 副反応(アナフィラキシー等)による事故を最小限にとどめるため、本剤の注射後しばらく観察を続けること。帰宅させる場合は、なるべく安静につとめながら帰宅させ、当日は帰宅後も良く観察するように指導すること。

- ・ 注射当日から2～3日間は安静につとめ、激しい運動、交配、入浴又はシャンプー等は避けるように指導すること。

2.副反応

(1)本剤の注射後、まれに一過性の副反応(疼痛、元気・食欲の不振、下痢又は嘔吐等)が認められる場合がある。

(2)過敏体質のものでは、まれにアレルギー反応[顔面主張(ムーンフェイス)、掻痒、じんま疹等]又はアナフィラキシー反応[ショック(虚脱、貧血、血圧低下、呼吸速迫、呼吸困難、体温低下、流涎、ふるえ、けいれん、尿失禁等)]が起こることがある。アナフィラキシー反応(ショック)は、本剤注射後30分位までに発現する場合が多く見られる。

(3)猫において不活化ワクチンの注射により、注射後3ヶ月～2年の間に、まれに(1/1,000～1/10,000程度)線維肉腫等の肉腫が発生するとの報告がある。

(4)副反応が認められた場合は、速やかに獣医師の診察を受けるように指導するとともに、副反応に対しては適切な処置を行うこと。

3.相互作用

(1)本剤には他の薬剤(ワクチン)を加えて使用しないこと。

(2)本剤と他のワクチンとの同時接種は避けること。本剤注射前に他のワクチンを投与している場合には、生ワクチンにあつては1か月以上、不活化ワクチンにあつては1週間以上の間隔をあけること。なお、本剤注射後他のワクチンを投与する場合は1か月以上の間隔をあけること。

4.使用上の注意

(1)猫において、注射部位に硬結や腫瘤が持続的に認められた場合は、獣医師の診察を受けるように指導すること。

(2)猫において、不活化ワクチンを同一部位へ反復注射することにより、線維肉腫等の肉腫の発生率が高まるとの報告があるので、ワクチン注射歴のある部位への注射は避けること。

七里動物病院

埼玉県さいたま市見沼区東門前 17-9

TEL:048-687-2490【受付時間】AM9:00～11:30・PM4:00～6:30

<休診日> 火曜、日曜午後、祝日午後、第3木曜午後

どうぶつの総合病院 救急救命科 夜間診療部

埼玉県川口市石神815(R122号沿い)

☎ 048-229-7299 【受付時間】21:30～翌3:00



裏面もご覧下さい